

国語**【解答】**

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
c	c	e	c	e
問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
a	a	b	d	e
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15
a	a	e	e	a
問 16	問 17			
b	b			
問 18	語彙は、本や映画、テレビ、人生経験などを通じたたくさんのインプットがあってこそ豊かになるものだから。			

【学習アドバイス】

本学の入試は、例年選択科目の中から2科目を選択して解答する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分となるので、各科目にかけるバランスにもよるが、平均的には50分程度が解答時間となる。2019年度の総設問数は18問、その内訳は5択の選択肢問題が17問、50字以内で解答する記述問題が1問。2017年度の総設問数は31問、2018年度は24問だったので設問数は年々減少している。しかも、2018年度までは現代文の大問が2題だったのが、2019年度は現代文の大問1題のみである。2019年度の文章量が約6,600字、2018年度は大問Ⅰの文章量が約2,000字で大問Ⅱが約2,500字、2017年度は大問Ⅰが約3,800字、大問Ⅱが約5,500字だったので、課題文の文章量は2017年度>2019年度>2018年度となっている。設問数と文章量の点から見て、2017年度、2018年度に比べて受験生は余裕を持って解答を出すことができたのではないだろうか。

以下では、3点に絞って具体的な学習アドバイスを示しておきたい。

第一に、「長文読解対策」である。2019年度出題された文章は、齋藤孝『語彙力こそが教養である』（角川新書）からのものだ。例年同様、平易な表現で書かれた評論あるいは随筆（エッセイ）であり、高校生にも読みやすい文章だろう。とはいえ、6,000字以上の長文は「一度ざっと読む」だけでも15分近くかかるのではないだろうか。だとすれば、「（記述問題を除いて）1問あたり1分半～2分」で解答するペースをめざして準備しておくといよい。具体的な対策は以下の2つ。①文章全体を二度も三度も読み返す時間的余裕はないので、「本文を読み進むのと並行して各設問に解答していく」方法をとること。②長文を要領よく読みこなすため、「各段落が『意見』部分なのか『具体例』部分なのか」をチェックしながら読む訓練をするとよい。練習素材としては、「教科書に載っている文章の出典」あるいは「本学の過去問として出題された文章の出典」を入手し、1章分ずつ「制限時間を10～15分」と決めて上記のチェックをしながら読む訓練を週に2回以上は行うとよいだろう。この訓練は、大学生になってから膨大な資料の分析をする際にも非常に役立つことを保証する。

第二に、「語彙力の増強」である。2019年度の出題内容は、漢字の知識を問う問題が1問、空欄に入る語句や文章を選ばせる問題が9問、傍線部と同じ意味の語句や文章を選ばせる問題が3問、傍線部の理由を選ばせる問題が2問、傍線部の理由を50字以内で説明させる記述問題が1問、課題文全体と選択肢との内容一致問題が2問となっている。全18問中、「漢字・ことわざ・慣用句」「接続語・副詞」「評論や随筆（エッセイ）などで頻出の文章用語」の知識で決まる問題が10問ある。要するに、50%以上が語彙力で決まる問題であるということだ。対策は以下の3つ。①学校の教科書に載っている文章の中で「意味がわからない語句」をチェックし、辞書で調べた意味とセットで「語彙ノート」に書き貯めていくこと。自分オリジナルの「語彙ノート」に「知識」が貯まっていくのを見れば自信もついてくる。②国語便覧や現代文用語集のようなサブテキストの中で「同義語」「対義語」「慣用句」「四字熟語」「評論用語」などのページに繰り返し目を通すこと。さらに、上記の「語彙ノート」に例文を書き写すようにすれば「文脈の推理力UP」にもつながり一石二鳥だ。③漢字に関しても、2018年度は2問、2019年度は1問しか出題されなかったとはいえ、10問ほど出題された年度もあったので、問題集を1冊はやっておきたい。

第三に、「文脈把握力」と「論述力」をUPさせることである。2019年度全18問中6問は「空欄や傍線部前後の文脈の把握力」で決まる設問であり、毎年1問出題される50字以内での記述問題は「傍線部前後の文脈から読み取ったヒントを正確な日本語で文章化する力」で決まる設問といえる。対策は以下の2つ。①空欄や傍線部前後の「言い換え」「対比」「因果関係」を意識的に探す練習をすること。②30～60字程度の解答字数の記述問題を集中的に演習すること。①②を両方満たすためには、本学の過去の入試問題を解くのはもちろん、記述問題中心の問題集を1～2冊こなすことも必要である。